□清水建美：**図説植物用語事典**　323 pp. 2001. 八坂書房. ¥3,000.

植物用語の解説であるが，普通の用語辞典とは異なり，1.植物群を表す用語．2.習性によって分けた植物の用語．3.花に関連する用語．4.果実と種子に関連する用語．5.葉に関連する用語．6.茎に関連する用語．7.芽に関連する用語．8.根に関連する用語．9.生殖に関連する用語．以上のように，植物の機能や習性を主にした区分をもとにして解説している．従って同じ器官でも，異なる形態を比較することで，特徴が掴みやすくなっている．分類体系としてクロンキストの分類表を載せているが，これはまだ研究途上のものであり，将来は大きく変更される可能性のある体系である．従来使われているエングラーの分類表も併せて載せてくれると，使用するものには便利であろう．　　　　　　　　　（山崎　敬）

植物の形や性状といった，分類や同定に用いられる用語約1400件が収められている．文字だけではわからない形状の説明のため，700点を超える写真や図が付けられ，図や写真だけの頁は87頁におよぶ．図のほとんどは梅林正芳氏の手になり，写真のほとんどは亘理俊次氏の作品である．おかげで，あちこち探さないと見られない植物の細部の良い映像を，この一冊で目にすることができるのはありがたい．昨今は著作権問題もあって，他社の作品に良い図や写真があっても，それを引用しにくい，またさせにくい風潮があるようだが，本書では一々了解を得て利用している．優れた作品をこのように有効利用することは望ましい．学術用語集植物学編増訂版（1990）には解説がなく，生物教育用語集（1998）は学習指導要領に制約された解説なので物足りない．その点本書は著者の永年の経験を踏まえて，自由に記述されている．その代わり，たとえば私がよく観察会で話しの種にする，コゴメウツギやキンモクセイの縦生副芽は，ジャケツイバラとエゴノキで代表されているし，*Magnolia* や *Ficus* を特徴づける托葉鞘の記述はない．多くの事典では用語の配列は文字順だが，本書では植物群，習性，花，果実と種子，葉，茎，芽，根，生殖と分けて，それぞれに関連する解説に伴って，用語の和文，英文（単，複数形を示す）が，植物名を挙げて示されている．

著者がまえがきやあとがきで述べているように，名前を聞き，小話しを聞いて終わりになるような自然観察会から抜け出して，特徴の観察から入って植物名に行き着くようなスタイルを目指したのが本書である．私も観察会については同じ意見を持っている．けれども盛り沢山で，著者の意図したものよりはむづかしい感じになったようで，形態学の教科書といったところである．分類の研究者が形態を扱うのは当然だが，これ迄は形態学者による形態学の本に頼ってきた．本書はその逆のはじめての例だろう．本書を足場にして，次にはそれこそ観察会に持ち出せるような，一般向きのものも工夫してもらいたい．すでに原ら（1986）による植物観察入門などがあるから，それと一線を画するものにしてほしい．付録として，形やつき方を表す用語，突起や毛・腺に関する用語，クロンキスト系による日本産種子植物分類表がある．和文索引，欧文索引がついているが，例示された植物のリストがあるとよかった．野外で見つけた植物の，どんなところに着眼点があるかがわかり，更なる観察に役立つからである．

（金井弘夫）